

八木秋子と辻晋堂

日曜美術館「マグマを宿した彫刻家 辻晋堂」

2020年11月8日、日曜日の朝、一つのメールが届いているのに気がついたのは10時半ごろでした。見ると「いそぎお知らせ。西川祐子」とある、京都の西川さんからのもの。何だろうと思い開けてみると、それは「日曜美術館で辻晋堂の番組がある」という連絡でした。「あっ」と慌ててビデオが撮れているかとチェックしたところ、ダメでした。朝一番にその日のテレビ番組をチェックして録画するのが日課で、その日も赤いマーカーでテレビ欄に印をつけていたのに、肝心の予約をやっていなかったという間抜けぶりでした。

放送開始の30分前にメールをいただいたのに、まったく恥ずかしいことで、知らせてくださった御礼の電話をすぐ入れました。「番組の構成がとてもよくできていて、インタビューも良かった」と言われ、「番組を見てからまたメールを今出したところ」とおっしゃっていたので、電話を切ってからメールを開いてみました。

それは以下のようなものでした。

2020/11/8, Sun 10:24 相京範昭様

辻のテレビ番組を視ました。映像には強い喚起力があります。いろいろなことを思い出しました。

番組の最初にでるのは、当時は東山にあった京都市立美術大学の校舎ですが、わたしは高校生のときにひとりでこの美大を訪ねたことがあります。文学部志望に決める以前には美術関連を探していました。番組にでてくる「東山にて」という辻の作品にはわたしにはそこにあった古い校舎のように見えます。高校生にはとても閉鎖的で近寄りがたく思えました。入り口がみつからなかった。

登り窯で陶刻をはじめた辻を解説している陶芸家宮永東山さんには、占領期研究中に何度もインタビューしました。もう10年以上前ですが、今もお元気なのを知ってうれしい。宮永解説は、窯の変遷を知り尽くしている方ならではの現場からの適切な解説でした。「何らかの哀愁というか、理屈では割りきれん美」「よい技術のためには愛情の深さが必要」と語られました

辻の長女、辻茜さんが父親を語っておられます。出町柳で手打ちそばの店をだしておられるのがこの方だと思います。そうか蕎麦打ちは陶土をこねる作業と似ている、そして辻が粘土にまぜた一度焼いた陶磁器を砕いた粒は蕎麦の実だなあ、と思いました。

わたしは茜さんの妹さん、辻の次女とそれとはよく知らずにフランスで一緒に旅したことがあります。旅は三人連れだったのですが、その方もわたしの友達もなくなっています。

スペインのグラダナで世にも不思議なガウディの未完の教会建築を続ける仕事にたずさわる日本人彫刻家、辻の弟子が語る辻もただものではありません。ぜひこの番組をNHKの再放送か、インターネットで探してみてください。

この番組をみてわたしは、80歳をすぎて長生きしてよかったと思いました。路傍の人であったわたしの記憶ですが、それでもひとりひとりの登場人物について思い出すことがあります。相京さんに最初にお会いになったときの八木秋子はきっと今のわたしとは比べ物にならないほどの出会いの数々をかかえていて、それを何とかして伝わる言葉にして相京さんへ伝えたいと身をよじっていたのだと思います。コロナ禍はおさまるところではなく、わたしたちは大きな社会変動の只中にいるのですから、生き延びて言葉を次へ伝えることに微力をそそぎましょう。ただし急ぎすぎぬよう、無理せぬよう、ゆっくり前進。

西川祐子

ネットで調べると2020年の今年、生誕110年の記念として「美術館《えき》KTOTO」で開催されているとありました。タイトルは「異才 辻晋堂の陶彫《陶芸であらざる》の造形から」というものでした。

翌週の11月15日、再放送を見ることができました。西川さんが言われた、辻の弟子の「外尾悦郎」の話が世代的にも近いので（私より4歳下）特に印象に残りました。まず「独りでも闘う」ことが辻から受け継いだ芸術家魂だということ、そして「陶器という限界がある条件の中で逆に無限の可能性を見せ」「いろんなことを想像させる作品にもちょっとした抜けたようなユーモアがあり」「その根底にはマグマのようなその人間としての偉大な力を持っている」と辻を語っていました。どれをとっても納得のいく、共感を覚える言葉でした。

数多くの辻晋堂展

辻の大きな展覧会をさかのぼって考えてみると、今回は「生誕110年」ですが、10年前の2010年には「生誕100年」「彫刻家 辻晋堂展」が鳥取県立博物館と神奈川県立近代美術館 鎌倉で開催されています。残念ながら私は行けなくて、カタログを古書店から購入しましたが、資料的にたいへん充実した内容のものでした。

それから「没後10年」の1991年の「辻晋堂没後10周年記念特別企画展 辻晋堂・八木一夫・堀内正和—1050年代京都から：新たなる造形への出発 たびだち」。そして三回忌にあたる1983(昭58)年の「現代彫刻の異才 辻晋堂展」です。これだけ何度も開催されるのも、おそらく辻の評価が「表現においても素材においても多様で卓越した作品を制作し、作家として恐ろしく懐が深い」(2010パンフ 尾崎信一郎[鳥取県立博物館副館長])と見られているからだと思います。

さて私は、今回の日曜美術館での「辻晋堂展」を契機に、八木秋子と辻晋堂について、これまで未発表の八木秋子の創作メモを中心に一つの報告をしたいと思います。

「凡さん」とは辻晋堂のこと

八木秋子の日記には「凡（ボン）さん」という名前が出てきます。収容されていた養育院内での日記、「転生記」の最後の夏に木曾をおもい、最後の日にも書いています。

◇1978年7月17日(月)「流汗淋漓。木曾をおもう。木曾へはいつ頃行かれるか、強行になろう。奈良井といえば辻凡さんに会えるだろう。昔のボンさんに

"木曾と辻

◇1978年8月8日(火)「猛暑、言葉なし。(中略)迷いこんできた文無しの裸の彫刻青年を知り、その人間から何を感じ、何を得たか」

この転生記の最後の日を書いた「文無しの裸の彫刻青年」こそボンさんこと辻晋堂です。

八木秋子が残した原稿は書きかけで未完成のものが多いのですが、次の「彫刻家とのゆめ」は最後に「千家氏の像」と書かれています。これは辻汎吉の名前で発表した「千家元麿氏像」に関わる出来事の創作メモとみて間違いはないでしょう。

創作メモ「彫刻家とのゆめ」

彫刻家とのゆめ 家を一戸。M信託へ。Y.S.M信託へ。メリンスの着物。街頭の札を見て、貸家さがし。大家を探す。口実。リヤカー。朝のねざめ。貧しさへの感慨。百姓との問答。土から生まれる無償の為。何が楽しみか。隣家への集金。革命は明日にも生れると思っていたのに。平凡の人生。夜、男の訪問客。新聞配達、彫塑。彼との問答。押入れてねむる。作品をこわされた。友との袂別。翌日、作品2点を。引越してきた。朝、夕方と、モデルになってくれ。彫刻台の持ちこみ。空箱がない。押し入れに蒲団のかわをうちつける。全身像を。着物をぬぐ。ぐるぐる。座像。裸のマヤ(ゴヤ)ねむる。彼の苦しみ。出勤。他新聞店の勧誘。諍い、スケッチ。畑の道で旧友と邂逅。消費組合加入。夕方、物資、彼の引っ越し、新聞配達やめ。火事。千家氏の像

1983(昭58)年の「辻晋堂展」

この創作メモを手掛かりに、私は1983(昭58)年夏、京都国立近代博物館で開催された「現代彫刻の異才 辻晋堂展」に行きました。そこに出品されていた一番古い作品、1939(昭14)年の「婦人像」は落ち着いた雰囲気でもあり惹かれました。このモデルは八木秋子ではないか、その年(1983)の4月30日に亡くなった八木秋子が引き合わせてくれたのではないかと思います。

そして、その冬、京都から辻の故郷の鳥取県立博物館での巡回を終え、東京の渋谷区立松濤美術館「辻晋堂展」の、辻の親友、堀内正和の講演会に出かけました。その「婦人像」のモデルは八木秋子ではないかとの質問を用意して行ったのです。結論からいうと、そのモデルは別の人だと証明されており、違っていました。しかし、その講演での堀内への質問で、間違いなく八木秋子と辻晋堂は出会っていて、その創作メモにあるように、しばらく同棲(同居)していたことがわかりました。

辻晋堂展での「堀内正和の講演」メモ

1983年12月17日 風が寒い日だった。渋谷の町は衆議院選最後の日とあって立候補者の演説が続いていた。東急本店を越え道に迷ったが2時少し前に渋谷区立松濤美術館に着いた。講演会場は100人近い人が入れるようなホールだった。

堀内正和の講演が始まった。司会者の紹介に「辻と堀内は火と水のようにだった」と辻が書き、周囲の者もそう評していたと言った。

◇ここでは堀内正和の講演会メモに加え、いくつかの資料から辻晋堂と八木秋子とが出会うまでの環境を描写します。

辻は母を早くして亡くし、家も貧しかったので尋常高等小学校では用務員をしながら学び、卒業後は大工に弟子入りしました。大工の時代、その天才的な器用さについて「鮭を彫って縄を通して吊っていたら猫が飛びついて評判になった」と故郷の後輩が地元の新聞に思い出を語っています。その評判から彫刻の才能を生かすよう周囲のものが勧め、1931(昭6)年に21歳で上京し、翌1932(昭7)年1月から淀橋の独立美術協会の洋画研究所で一年間素描を学びました。そのころ東京高等工芸学校にいた田中一郎を通じて堀内正和と知り合いますが、同じ工芸学校出身には独立美術協会の画家斎藤長三もおり、みな同じ仲間でした。辻が新聞配達をしながら住んでいたのは池袋界隈で、そこは地方出身の芸術家の卵たち、画家や詩人などが多く住んでおり、池袋アトリエ村、池袋モンパルナスと呼ばれました。その配達区域に千家元麿の家があり、強引に押しかけて制作したのが「辻汎吉(ハンキチ)」の名前で「第20回日本美術院展」1933(昭8)年9月に出品した「千家元麿氏像」でした。

また詩人小熊秀雄とも長崎仲町の千家元麿の家で1933(昭8)年に出会い、その2年後に「詩人の首」を制作したと彼とのエピソードも加えて後に書いています。そして棟方志功とも親しく、1939年(昭14)には「棟方志功の藝術」という文章で「(棟方の資質は)まことにその素朴さはかがやかしき真実であり、掘りたての泥まみれのものの新鮮さと、生命力の逞しさをもっている」と書いていますが、これは辻晋堂が発表した初めての文章だと思われます。棟方と辻の交遊については、後に辻と同居して制作作業をともにした彫刻家の千野茂が「辻晋堂氏の思い出」として臨場感たっぷりと書いています。

「婦人像」について堀内は、「婦人像」とそれ以降とは作品の感じが変わった。ロダンの影響がある「婦人像」の場合はまだ作品がリアルで、木の素地を生かし切っていない。その後の「鎌を研ぐ男」はその制作現場に堀内は立ち会い、木の素地が出た方がいいということで、わざとむき出しのまま作っていたと語りました。

◆以下相京が質問した内容

講演が終わり、質問が二つほど続いた。そして、八木さんのことで質問した。あの「婦人像」のモデルは特定できるのか、私が関わってきた八木秋子ではないかと。堀内が言うに、私はあそこ病気がちでよくわからない、鳥取大学の人の文章を読んで知ったのだと言われた。そしてちょうど自分の斜め前に座っている人に向かって「あんた知っているか」と聞いた。すると「八木さんだろう、知っているよ」とその人は答えた。しかし一方で、鳥取博物館学芸員の三谷さんは、そのモデルは鳥取出身の中尾彰氏の奥さんだと言われ、辻晋堂の奥さんもそう言っているという。また、中尾彰自身も問い合わせに答えたと言う。

一応それで話は終わったが、講演が終わって席を立ったら、八木さんを知っているという人が振り向き(その時名前を聞いたが、このメモを書いている時ははっきりと思い出せ

ず、後に記憶をたどって思い出し、調べたら独立美術協会の斎藤長三さんだった)「あのご亭主が社会運動をやっていた八木さんでしょう、堀内君ほど忘れをしているんだよ、彼は病気の看病をしてもらったこともあるし、辻も丹前を縫ってもらって世話になっていたよ」と言われた。また、講演を終えた堀内も斎藤さんと話している所へ近づいて来て、思い出したように「辻と同棲した人か」と言っていた。

独立美術協会の斎藤さんは人が良さそうで、八木さんのことについてそう話してくれた。ベレー帽をかぶっていて丸顔でやや禿げていたような印象で、後に斎藤長三さんの関連書籍を古書店から取り寄せたらその記憶どおりだった。すぐにでも自宅を調べてインタビューしなかったのは、そのとき自分の仕事が急に忙しくなってしまったのだろう。残念だ。

その時、三谷氏と話した。持っていった八木秋子の写真を見せたら、「婦人像」は顔が違ふと思うが、「少女頭像」が何か横顔が似ているような気がすると言っていた。その後、地元の新聞に特集された辻晋堂の数々の資料を送ってくださった。それから辻さんの書いたものはあまり信用できない、反語として受け取ったほうがいいとも言っていた。

いずれにせよ、八木さんは満州へ行く前に奈良に寄って仏像を見て行ったと書いている。またその彫刻家との出会いが後に高田博厚との出会いに繋がってゆく。そして、彫刻家が芸術のために一途にわき目もふらずに邁進するところ、そこに八木秋子は自分の血と似た世界を感じたのだろう。その意味では辻晋堂の影響は八木秋子の内部においてかなり大きいものであったと思う。己を知る意味で、それは重要だった。1983 記

以上が堀内正和の講演会メモを中心にまとめたものです。

喧嘩っ早い、熱情家の辻晋堂

そのころ、八木が住家を構えた長崎仲町の千川近くには千家元麿が住み、その長崎仲町を新聞配達地域としていた辻汎吉がいました。「彫刻家とのゆめ」によれば、家探しをして入居したところに男の訪問客、彫刻家の青年が「作品をこわされ」「友との訣別」とあります。この「訣別」も辻晋堂の若いころの専売特許のようです。辻晋堂は「堀内正和について」で書いています。「(堀内は最近酔うと同じことを繰り返す)お前は若いときはよく喧嘩して、絶交だなんて、誰とも絶交だ絶交だと云ったもんだが、ハハハ。だがおれとは絶交しなかったなあ。こいつは絶交の名人だからな。ハハハハ」と言い、辻との腐れ縁を語ったと書いています。初対面の八木に「モデルになってくれと朝、夕方に言う」ところも、千家に強引にモデルを引き受けさせたというところにも、そのころの喧嘩っ早い熱情彫刻家青年「辻汎吉」が見えてきます。

以上のことから八木秋子と辻晋堂が出会った時期も特定できそうです。堀内が話しているように、本人はそのころ病気がちで、1933(昭8)年には胸部疾患で転地療養し、東京に戻ってくるのは3年後でした。すると八木秋子が彼の看病をし、寒さをしのぐために辻の丹前を縫ったというのは、少なくとも1932(昭7)年の秋口から翌1933(昭8)年にかけての冬、そのある一定の期間、八木秋子と辻晋堂は同棲(同居)していたと考えられます。

八木秋子と辻晋堂の1931(昭6)年～1933(昭8)年

二人の出会いまでの状況、1931年から1933年のことを書き出してみると以下の通りです。

・1931(昭6)年

八木秋子(36)は農村青年社運動で信州の農村への講演や旺盛な執筆活動、解放劇場の女優など活動の最盛期、

- ・同年 辻晋堂(21)は上京し、翌年の1月から新聞配達をしながら素描を学ぶ。

・1932(昭7)

1月15日、八木の愛人であり運動の中心だった宮崎晃が逮捕される。

2月上旬 八木秋子は髪を切り男装し、彼の奪還を図ろうと警察署周辺を徘徊する。

4月3日 八木たちも全員検挙。

・1932(昭7)年

6月23日、八木秋子独り保釈で出所。

・しばらく運動の再起を図ろうとして朝鮮の仲間の所に世話になりながら、アナキスト仲間を訪ねたりするが、彼らからは却って反発されて査問を受ける

・獄中にある宮崎晃への本の差し入れなども続けていたが、関係も冷却。極貧、孤立無援。

・1933(昭8)年

堀内正和は胸部疾患のため、転地療養。

9月、辻汎吉の名前で「千家元麿氏像」出品。

10月、辻晋堂、西池袋の下宿先で急性虫垂炎。手術。山梨と鳥取で静養。

同志奪還に燃えた八木秋子の挫折と内省

さて、八木秋子と辻晋堂が同棲（同居）した1933(昭7)年の寒くなり始めた秋口あたりから翌年の春くらいまでの八木の精神はどうだったのでしょうか。年表で見たように、その年の1月に逮捕された宮崎の奪還を企てたり、「奪還せよ」の檄文を書いたり、高揚した冬を過ごしていましたが、4月に逮捕。6月に保釈されたものの行動を共にした信頼する同志は全員獄中、孤立無援。極めて閉塞的な精神であったということは十分に想像できます。その状況の中で若き辻晋堂(23)堀内正和(23)斎藤長三(23)たちに出会いました。当時八木秋子 38 歳。

その精神を読み取れるのが、保釈されて2年後、1934(昭9)年7月『輝ク』誌上に掲載された「希ふ！」です。その要旨は「めまいの日々が続く、それは極度の栄養不良と精神の疲労。まったく孤独な2年間、失われた過去と空しい自分の姿をみつめながら。＜闘い＞という意識がいつか傲慢を植え付けていた。憎悪と不満と憤りが私をしめつけた。権利と奪還に心は燃えていた。張り切っていた弦がぷつん！とひとたび絶たれたとき、これらのものは、果たして私の真実のものだったろうか」と我が身を問うのでした。（この文章は八木秋子がなくなって2年後に発見されました）

私は1975年、八木秋子に初めて会った時、この内省の精神を見たのだと思います。1960年代後半から1970年の初めにかけて、全共闘運動の高揚と挫折を経た我々の世代にとって、八木秋子の「高揚と内省」を精神の底に秘めた「かたち」は魅力でした

八木秋子と辻晋堂の共有する世界

ここに一枚のチラシがあります。2005年に辻晋堂の故郷、鳥取県米子市美術館で「とっとり県民の日」関連事業として開催されました。

その裏面の辻の紹介を引用します。

「—自由 孤高—彫刻家・辻晋堂展」

☆辻の作家活動は、およそ50年に及びます。そして、それは、初期の瑞々しい木彫具象彫刻、続いて鉄やセメントを使用した力強い抽象彫刻、さらには不思議な魅力を秘めた陶彫へという、他に類を見ないほど創造性に富んだものでした。

この展示では、時代の風潮に流されることなく、自らの信ずる道を貫きとおし、独自の彫刻世界を形成し、世界にその名を広めた孤高の彫刻家・辻晋堂を米子市美術館と鳥取県立博物館の所蔵作品を中心に紹介します。

「自由と孤高」というタイトルは八木秋子にもふさわしい言葉です。彼女の生涯は、絶対自由を求めて「ああ、変わらなければ」とそれまでの自己を否定し、孤高の生活の中で「さらば、われ、わが生涯を迷いと不安に貫ぬかん」と果敢に言い放つものでした。

その原点というべきものは、「革命は明日にも生まれると思って」激しく活動した半年後の孤立無援、挫折・内省の八木秋子の家に、突然飛び込んできた23歳の若き彫刻家辻晋堂との出会いだっただと思います。その時どのような会話をしたのか、辻の言葉や行動から八木は何を感じたのか。今となってはそれを聞くことはできませんが、しかし、「自由と孤高」の辻晋堂の作品世界がそれを物語っていると私は思います。

その一瞬の交差した世界は八木秋子にとって生涯にわたって忘れえぬことだったのでしょう。養育院での「八木秋子日記」（転生記）の最後の日に辻ボンさんのことを書いている事実は象徴的なことだと言えます。

堀内正和の1933(昭8)年療養時代の思い出

ところで、辻晋堂について時々目にとまった資料を集めてきましたが、今回あらためて読み返すといくつか気がついたことがありました。堀内正和も1933(昭8)年の胸部疾患療養時代の体験を70歳代後半(1987/1988)に振り返っています。

朝日新聞の「三水鳥話」

《霞か雲か—自由の象徴か汚れの象徴か 同じ雲も見る人の心で様々》で、「晴れた日の青空に真綿のような白雲が浮かんでいるのを眺めていると楽しい。じっと見つめているとそのうちに真綿の雲は少しずつほぐれて綿屑になり、綿屑は次第に細くなって糸屑にな

り、とうとうお仕舞いにはふっと吹き消されるように青空の底に吸い込まれてしまう。後には青空だけが何事もなかったように深い静けさをたたえている」。すると「生きてて良かった、という気分になる。結核菌に犯された肺臓はすっかり洗われて清浄に戻り、犯した罪は仏の慈悲に許されて潔白に戻った、そんな解放感を覚えるのである」と書いた25年前の文章を引用し、そのような感慨を持ったのも療養の体験があったからだろうと語ります。

翌年、同じ新聞の「余白を語る」《はかない雲の姿に『明晰な神秘』追う》では、「存在することができないその存在になりたい」「戦争中は役に立つ人間ばかりいた」「彫刻も作品製造業にはなりたくない。出来ることなら無名有実の人間になりたい、という大望を抱いて」と若いころの「大望」を語ったあと、前年と同じ「消えていく雲」の話があり「消えていく雲と消えては困る彫刻とは矛盾の関係にあるが、僕はこの二つのものを一つにしようとしているところがある。明晰でしかも神秘があるもの」「明晰だけでもだめ、神秘だけでもだめ、『明晰な神秘』をめざしていまだに堂々めぐりをしている」と語る堀口にも、24歳の療養時代の体験を50年以上たっても課題として求める若い精神性があります。

友人 下村良之介のいう「出来てしまう造形」

また辻晋堂の著作集『泥古庵雑記』には「下村君の『舞妓』」という表題で下村良之介のことが書かれています。八木秋子の逝去後、私は満鉄アジア号の機関車名から取った『パシナ』という冊子を発行してきました。その『パシナⅢ』(1985秋)に「ちょっとヘンダな」というタイトルで、私は下村良之介の文章に触れています。

滋賀県にある知恵おくれの子どもたちの施設、落穂寮では「粘土を使ってお面や土偶を作りたいとき、作りたいように作っている」のですが、その作品展のパンフレットに下村が書いた『完成の悲しみ』に私は共感しました。

「彼等の造形は結果を予測して造られたものではないということに気がついた」と言い、「彼等は、造形する行為そのものに生命を燃焼させているのである。あくまでも結果を求めて積み上げてゆく私達の作業と違って、彼等にとっては、造形すること自体が活着している証しなのである。作ろうとして作ったものではなく、出来てしまう造形なのだ」つまり「いいウンコたれてるなあー」という。

この下村の「出来てしまう造形」には、堀内の「明晰な神秘」、棟方志功を評した辻の文章、辻が「腹の底の方から自然に流れ出て来て、それが形になってくるやうでない面白くない」という言葉と相通じる世界が見えてきます。

彼らは作品の表現についての発言ですが、私は「歴史と自己」「社会と自己」と、それぞれ垂直と水平の交差する瞬間でどう生きればよいかということに思いが向きます。八木秋子に関わっているころ、「八木秋子通信」は時代(歴史)を背負っているのだという自負、またその時代環境(社会)の中から自然に産まれてきた生命体のような活動だという自覚的感覚(決して受け身ではない、しかし後述する「主体的」でもない)は、辻晋堂たちの語る世界と重なるところがあります。

最初の辻晋堂の番組に戻れば、弟子の外尾が「独りでもやる」という自覚は私も八木秋子の通信「あるはなく」を始めた時から持っていました。

あの頃、水俣病闘争のような反公害運動の社会的反響に乗って、「告発する会」や「守る会」が、わたし相京の周囲にも生まれました。新左翼セクトが主導する運動もありましたが、しかし、我々の世代の中にも、個人としては「主体的」に運動に関わっていると言いながら、「仲間づくり」をして互いに凭れかかっているように思えるものもありました。だから私はセクトも「仲間」主義にも拒否反応を持っていました。

私は、1968年の浪人と翌一年間のバリケード生活に終止符を打ち、1970年21歳の春、身の回りからの変革、「人と人との関係」の重要性を問い続けることを「独りでもやる」と言いながら大学をやめました。そして、アナキズム系の極小印刷屋のオフセット印刷工として仕事をこなしつつ、内心は焦りと不安を抱えながら、酒と麻雀、週末は競馬などの日々をおくっていました。

しかしその競馬がきっかけとなって、3年後、白井新平という日本の競馬界の革命異端児で戦前はアナキズム系の労働運動に関わった人物のもとで働くようになり、1975年、白井の気まぐれな「老人慰問」に同行して出会ったのが八木秋子(80)でした。

その後、何度か個人的に訪ねるうちに「私は変わらなければ」と自己を否定しつつ、抑えがたい爆発的なエネルギーを内に秘める彼女に興味と関心を深めていきました。私が26歳から27歳にかけての時でした。

そして八木秋子の老人ホーム入りをきっかけに始めた八木秋子個人通信「あるはなく」(第1号《1977年》八木秋子(82))は、編集人の自分にとっては「八木秋子と読者をつなぐ」という未知の発行媒体の世界でしたが、進めるうちに、「通信」によって産まれた関係性が有機体、八木秋子も読者も私も「通信」と往還し合うことで変化する生命体のようになり、その現代性、歴史的な意義を確信しました。そして、彼女には信じられないほどの豊富な人脈、著名な政治家、宗教家、芸術家、作家たちとの出会いがあることを知り、それを今という歴史に刻む行為を在野で独自に作り上げていく生甲斐も感じていました。

つまり「独りでもやる」こと(信頼できる何人かの友人の協力はありましたが)は、八木秋子との信頼関係を保持するためにも、大学をやめたことを自覚して新たな世界を築くためにも、世代にながれる「仲間」主義を拒否するためにも、私にとっては必要なことでした。

辻晋堂のテレビ番組は私にとって実に良いタイミングでした。これをきっかけに「八木秋子の創作メモ」を解説しようと始めましたが、いろいろ資料にあたっているうちに、辻の世界やその周囲の人たちの言葉からずいぶん触発されました。やはり私にとって八木秋子との出会いが始まりであり、八木秋子は私の大学でした。その生涯を辿ると「明治・大正・昭和」時代の先端と底辺がみえてきます。また、日記にある「奈良井といえば辻凡さんに会えるだろう。昔のボンさんに」は依然として謎のままです。まだまだ八木秋子の森は深くて広いようです。これからも構えてセレンディピティを楽しみたいと思います。

先行きが見えないコロナ禍の現在、養育院に入る前の1970年前後の『八木秋子日記抄』の制作を進めています。およそ1000頁になろうかと思います。

八木秋子は「希ふ！」の末尾で「生きている喜びが、何かの働きを人のためにしたい、真実に触れたい、虐げられる人々とともに生きたい—そう、涙の滲むような気持ちを湧かせる。わたしはこの瞬間を、貪るように生きたい」と書いています。編集中の『八木秋子日記抄』も、宗教や文学、政治に深い関心を持ちつつ、近所の同じ生活保護を受ける人たちとの交友の日常が多く占めています。満鉄の留守宅相談所、戦後の母子寮寮母時代の生活もやはり同様だったと思います。虐げられる人々との日常を生きることを貫き通したのです。

著作集Ⅲ『異境への往還から』の帯文に日記から引用した「さらば、われ、わが生涯を迷いと不安に貫ぬかん」、この不安と迷いのコロナ禍だからこそ、八木秋子の発したこの言葉に込められた腰のすえ方を心したいと思います。

堀内正和について f

1980 『現代の眼』 306 東京国立近代美術館

「汎の三水を取ってしまって、僕たちはボンさんと呼んでいた」 1983 パンプ 堀内正和

詩人の首.

1980 『旭川市民文芸』 221 小熊秀雄没後 40 周年記念

棟方志功の藝術

1939 『工藝』 101号 聚楽社

辻晋堂氏の思い出

1983 『視る』 194 京都国立近代美術館

斎藤長三(1910-1994) 画家、独立美術協会会員。武蔵野美術大学教授や日本大学芸術学部講師などを歴任。作品は郷土の酒田市に寄贈し、酒田美術館所蔵。

1984年頃だと思われませんが「池袋モンパルナス展—パルテノンとその周辺の作家たち」が開催され、そのパンフレットには独立美術協会の斎藤長三さんも名前を連ね、彫刻では菅沼五郎さんが出品されています。菅沼さんは大杉栄と野枝の子ども、菅沼幸子さんのお連れ合いの方で、幸子さんへの問い合わせに「辻さんとはあのあたりでよく逢ったのでアイサツはしたが、その程度」とおっしゃっていたとの手紙もいただいていた。

『輝ク』：『女人芸術』廃刊後、長谷川時雨が組織した「輝く会」の機関誌

「あるがままと＜負＞—八木秋子の＜子捨て＞を巡って—《昭和9年になぜ健一郎と会おうとしたか》」

1985年秋 『パシナⅢ』

「三水鳥話」

堀内正和 朝日新聞 1987/5/15

「余白を語る」

堀内正和 朝日新聞 1988/5/20